

## ヴォルテール小説の發展

——『自然兒』を頂點とする——

### 序

現代の作家にして自らの作品に「哲學的小説」というレッテルが與えられることを最高の名譽とみなす者が何人あるだろうか。彼らのほとんどはそこにいさゝかの輕蔑を感じるはずである。なぜなら彼らは現代における哲學の權威の著しい失墜を知っているからだ。しかし作家が「哲學的小説」と稱せられることをむしろ誇りとした時代もあった。すなわち哲學が絶大な權威を獲得していた或いは少くとも絶大な希望を約束していた時代もあったのだ。ヴォルテールの生きた十八世紀フランスはそうした時代に屬する。したがってそれは「哲學的世紀」と

高橋安光

も呼ばれている。こうした意味から、自らの作品に好んで「哲學的小説」と副題したヴォルテールはまさしく時代の作家であつたはずである。しかしそれは直ちに彼が哲學者でもあつたということではない。『哲學辭典』（初版一七六四年）の内容が示すように彼は哲學的體系を缺如していたばかりでなく哲學的思索においても淺薄であつたからだ。

「私は常日頃こう考えてきた、スピノーザはしばしば彼自身ですら自らを理解しなかつたし、それ故にこそ世の人からも理解されなかつた、と。」「『哲學辭典』の「神」の項）

こうしたスピノーザにたいする見解一つを取りあげて

も、ヴォルテール哲學の通俗性は明瞭であろう。しかしスピノーザが異端として狂信陣營から非難される時は敢然として彼を擁護するヴォルテールを見のがすこととはできない。

「スピノーザよ、貴方はたしかに曖昧である。しかし貴方は世間で言うほど危険であろうか。私は否と主張する。……危険な著者とはいかなる人物か。それは宮廷の閑人や貴婦人連に讀まれる著者である。」

ヴォルテールによって考えられた哲學および哲學者とは學問的であるよりは常識的であり、理論的であるよりは實踐的であつたのだ。

「ジャン・ジャック(ルソー)は書かんがために書いたが、私は行動せんがために書くのです。」(ヴェルヌ氏宛書簡、一七六七年四月廿五日付)

ルソーにたいする曲解は許されぬが、ヴォルテールの實踐的性格は充分評價されよう。したがって一般に啓蒙思想家と稱せられる彼の思想原理は行動の哲學にあつたと言えよう。

だが彼の思想的情熱を重視して、それを彼本來の姿と思ひこむことは、大いに問題であろう。處女作『エディ

ープ』(一七二八年)をたずさえ古典主義悲劇作家として文壇に登場したヴォルテールは晩年の『イレヌ』(一七七八年)にいたるまで自らの才能は舞臺における詩作にありと信じつゞけたのである。

「學窓より巣立つ青年は辯護士、醫者、神學者、詩人のいづれにならうかと思案する、彼はわれわれの財産、健康、靈魂、悅樂のいづれに取組もうかと思案するものである。」(『哲學辭典』の「詩人」の項)

また『百科全書』の寄稿家たちもヴォルテールの名を引用する場合にはほとんど例外なく「ラ・アンリアードの作者」(『ラ・アンリアード』はヴォルテール初期の傑作敘事詩)と彼を呼んでいる事實は、世評もまた彼を偉大な詩人とみなしていた證左である。韻文から散文への移行は決して困難ではなからう。しかしヴォルテールが小説らしきものを書きはじめたのは一七四六年の『浮世のすがた』が最初であり、作者五十二歳の時であるのは、彼の文學的情熱があくまで韻文に向けられていたことを物語ってはいまいか。すなわち彼の「哲學的小説」なるものが彼の文學的執着においてはやはり第二義的地位に留っていたことを示してはいないだらうか。さらに強くき

めつけるならば、ヴォルテールは自らの小説家としての才能に自信をもっていなかったのではなからうか。有名な『マノン・レスコー』の作者アベ・プレヴォにたいする次の彼の評言は以上の疑問にいささかの解答を與えてくれそうである。

「私が今までアベ・プレヴォについて述べてきたことは彼の不運を惜しむためでしかなかった。それは彼に悲劇(ヴォルテールの場合は古典主義的韻文悲劇)を作つて欲しかったという私の希望に他ならぬ。なぜなら情念の言語こそ彼天性のそれであるからだ。」

この評言からは少くとも二つの(或は矛盾した)結論が引出される。第一はヴォルテールが小説を第一級の文學とみなしていなかったこと、第二は彼が自らの小説家的才能において他に譲らざるをえなかったこと、である。だが人間ヴォルテールの文學的情熱もしくは自負を知る者にとっては第一の結論しか認めることはできない。それが客觀的にいかに誤つていようとも。しからばそうしたヴォルテールの文學的自惚と知りつゝも敢えて彼の「哲學的小説」を論ずる所以を尋ねられるならば、私はこう述べよう、作家が不得意とした領域において彼を論

ずることは彼が得意とする領域において彼を論ずることに劣らず作家の本質を把握できそうに思えるからである、と。

ヴォルテールの小説(各版によって多少異なるが、プレイアード版では廿六篇が收められている)の中より年代順に『ザディイグ』(一七四八年)、『カンディード』(一七五九年)、『自然兒』(一七六七年)、『バビロンの王女』(一七六八年)の四傑作を取上げて彼の小説の特色および變化をたどつてみよう。

『ザディイグ』はバビロンの賢者ザディイグの數奇の運命の物語である。當時やはりバビロンを舞臺とする悲劇『セミラミス』(一七四八年初演)を手がけていたヴォルテールが他方こうした東方物語を書いたのは偶然ではない。『セミラミス』は論敵クレビヨンの同名の悲劇への對抗作品とみられるが、それは單なる競争心によるものではなかった。ヨーロッパ・キリスト教社會における狂信に生涯挑戦しつゞけ、すでに『マホメット』(一七四一年初演)を發表せるヴォルテールは、ヨーロッパを超

えた世界にたいし趣味以上の關心と智識をいだいていたのだ。彼における「東洋」は「西洋」を批判するための手段であり理想でもあった。したがって『ザディグ』は近東的趣味に彩られた諷刺小説となった。

すぐれた資質と財産に恵れ、情念を抑える術を心得つゝも人間の弱さを尙び、自然學および形而上學に通じ、ゾロアスターの教えに忠實なパピロンの青年ザディグは「人間のなりうるかぎりでの賢者」であった。ザディグという名はアラビヤ語で「正しき人」を意味する。彼の最初の戀人として登場するセミールは『セミラミス』の女主人公の名を連想させる。物語はまずこの二人の戀人の間に生じた不運な出來事から始められ、セミールは美貌と身分と財産に恵れているが、彼女に横戀慕する貴族オルカンが戀人ザディグを傷害して片輪にするや、彼を捨ててオルカンに走る無節操な女性として描かれる。幸にも片輪にならずにすんだザディグはやがて町娘アゾラと結婚する。だが彼女もセミールに劣らぬ浮氣女であった。失望したザディグは「神がわれわれの眼前に置いたこの偉大な書物(世界)の中で讀書する哲人にまさる幸福はない」と信じて専ら勉學に勵む。だが聰

明が彼に災を招き、善良が彼に惡を招き、幸福が彼に妬を招く。國王の寵を得て大臣となり、とりわけ王妃アスタルテの愛を得たザディグは宮廷人たちの嫉妬と陰謀によってパピロン退去をよぎなくされ、やはり宮廷を逃れる王妃と同様に、幾多困難の待ち受ける當なき旅にのぼる。そして二人は最後に結ばれるまで運命のいたづらに翻弄されつゞけるのだ。

もちろん『ザディグ』の眞價はこうした「すれ違い小説」の筋書の興味にあるのではない。ヴォルテルがそこで追究したものは、あくまで人間の幸福であり、それを阻む人間の惡徳にたいする諷刺である。「ヴォルテルは生きた人間を描くことができなかつた」とは特に彼の小説にたいする最大の非難である。たしかにそれは『ザディグ』についても言える。神のごとき叡智を有するザディグは最初から戀愛などできる人物ではない。それは理性という名のマリオネットに他ならない。だが反面ランソンも指摘したように「マリオネットの世界ほど人間の心理を強く訴えてくるものはない」という逆説も信ぜられよう。「書物の大半は讀者によって作られるものだ」と述べるヴォルテルは取えてマリオネッ

ト世界に藉口して眞實を描こうとしたのだ。だがそれが近代的心理小説からはるかに遠い作品であつたことは否定しえない。

パウル大學のワルトブルグ教授は舊著『フランス語の進化と構造』の中で『ザディイグ』より一節を引用し、それをルソーの『新エロイズ』の一節と比較し、いかにヴォルテールの文體が不整であり律動に缺けているかを論證しているが(一九五〇年、第四版、二二二—二二五頁)、この比較はあまりにも獨斷的である。『ザディイグ』はマリオネット小説を殊更に意圖した作品であるばかりでなく、『新エロイズ』と比較するべきなら共通の文學的思想的基盤をもたないからだ。もし時代を超えることが許されるならば、それはむしろアナトール・フランスの『バルタザール』のごとき小説に比較するべきであろう。兩作品の冒頭をそれぞれ引用してみよう。

「モアブダール王の頃、ザディイグといふ一青年がパピロンに住んでいた。彼のすぐれた資質は教育によつて培われた。金持で年も若かったが、彼は自己の情念を抑えることができた。彼は何事にも動じなかつた。しかし彼は常に冷靜であらうと望んだわけではなく、人間の弱さ

を尙ぶことも知っていた。」(『ザディイグ』)

「その頃、ギリシヤ人からサラシンと呼ばれたバルタザールがエチオピアを治めていた。彼は色こそ黒いが目鼻立ちはずぐれていた。彼は素直な精神と寛大な心情の持主であつた。」(『バルタザール』)

この二つの作品は小説的假構および文體のみならず思想内容においてもかなり類似している。だが兩作品を讀み了つた後には、ヴォルテールの生硬な觀念性とフランスの典雅な審美性が微妙な對照として印象づけられるはずである。そこに受けとめられた抵抗感はたしかにヴォルテール文學の特質であり、長所とも短所ともみなされるものだ。しかし比較において作品の本質は決定されない。もし比較によるとすれば同一作者の作品間のそれによつてのみ彼の本質をうかがうことはできよう。

## 二

『ザディイグ』より『カンディード』への發展とは、從來のヴォルテール研究家が例外なく取組んできたテーマである。彼らはこの二小説の間にヴォルテール思想の決定的變化を認めようとつとめてきた。たしかに『カン

『デイド』の作者は『ザディグ』のそれとかなり異つた環境に移っていた。個人的には、十年來の戀人シャトレ公爵夫人の死亡(一七四九)が彼に與えた打撃は大きかつた。愛するエミリー(彼は夫人をそう呼んでいた)を失つたヴォルテールは以前から文通していたプロシヤのフリードリッヒ大王の招きに應じて一七五〇年ベルリンに赴いた。この自ら「無憂哲人」と稱する北方の啓蒙君主がヴォルテールに或る種の期待をいだかせていたであろうことは容易に想像されうるが、ポツダム宮に生活を共にした現實のフリードリッヒはやはり彼にとって一介の専制君主に他ならなかつた。ベルリン・アカデミー院長モーベルチュイにたいするヴォルテールの非難(『アカキア博士駁論』一七五二年)は兩雄の間に決定的分裂をもたらし、一七五三年ヴォルテールは石もて追われるごとくベルリンを去ってライプチヒ、ゴータ、フランクフルト、シュヴェチンゲン、コルマールを経て一七五四年十二月ジュネーヴに到着した。彼のジュネーヴ滞在は『カインデイド』出版後フェルネーに移り住むまでつゞけられる。社會的には、一七五六年五月に勃發した七年戦争や、その前年に起つたリスボン大地震を擧げることがで

きる。この人災と天災は六十歳を超えたヴォルテールのみならず全ヨーロッパの知識人たちに少なからぬ動搖を與えているのだ。ブランドスは名著『ゲーテ研究』の中でこう述べている。

「ゲーテが七歳の時、七年戦争が勃發し、一七五六年フリードリッヒ大帝はシュレージェンに侵入した。今や近隣諸國のみならずドイツ自身も二つの黨派に分裂し、一方は大帝に與し、他方は反對した。ゲーテの祖父はフランクフルトの陪審員として戴冠式の際フランツ一世の天蓋を捧持し、皇后から肖像つきの重い金鎖を拜領したことがあるので、娘や婿の二・三の人と共にオーストリアに左袒した。ところがアル七世によって帝室評議員に任命されたゲーテの父はプロシヤに味方したのである。そこで日曜日の家族の團欒はまもなく亂れ、討論が起り、争いが生じ、いたましい場面が展開された。また一七五五年には大ヴォルテールに起つたことが、この少年(ゲーテ)にも起つた。すなわちリスボンの地震は慈愛の神にたいする彼の堅い信仰を動搖させたのである。」

ゲーテが生涯ヴォルテールに寄せていた尊敬の念はこうしたヨーロッパ人共通の精神的苦惱を背景としてはじ

めて納得される。

以上の個人的社會的事件がヴォルテールにかなり大きな思想的變革をよぎなくせしめたであろうことは、小説『カンディード』によって明白である。こゝでヴォルテールの論敵ルソーの次の言葉(『告白録』巻九)は『カンディード』の成立に有力な根據を示してくれる。

「すべてが力を合せて私をこの暢氣な氣狂い沙汰の夢想から引張り出そうとしているように思えた。リスボンの壊滅を詠じた一冊の詩篇(ヴォルテール作『リスボン震災に關する詩』)を受取った時、私はこの病氣から十分に恢復してはいなかった。この書物は著者(ヴォルテール)から私に送られたものと想像した。それで著者に挨拶したが、作品について一言する義務があると考えた。私は手紙を書いてそれを實行した。……この著者がやはり一切は悪であると考えているのを見て心打たれた私は、氣の毒なこの人を本来の彼に歸らせ、一切は善であることを彼に證明しようという無分別な計畫をいだいた。ヴォルテールは常に神を信じているように見えながら、實際は悪魔しか信じたことはなかったのだ。……その後ヴォルテールは返事を發表したが、私には送ってこなか

た。この返事とは、他ならぬ小説『カンディード』であるが、私は読んでいないから、それについては語れない。」

ヴォルテールがリスボン大震災をいかなる意圖を以て『カンディード』の中に取材したかはルソーのかなり手前勝手な告白と決して無關係ではあるまい。ライプニッツの豫定調和論を信じこませられている主人公カンディードはたしかにルソーに當てつけたとも言えよう。だがそれが單なる個人をモデルにした作品であったとしたならば、個人攻撃に敏感なルソーをして「私は読んでいないから、それについては語れない」などとシラをきらせてはおかなかつたはずである。それが傑作であることはルソーの故意の沈黙の證明するところである。

こうしたヴォルテールの個人的社會的體験から生れた『カンディード』は『ザディイグ』といかなる面において變化發展を遂げていたのであろうか。「處はウェストファリア、領主ツンダー・テン・トロンク殿の館に、生來氣だての良い一人の青年が住んでいた。顔つきからもそうした心根は察せられた。氣性も至極さっぱりとしていて、分別も中々であった。カンディードという名前も

けだしそのためであつたらう。」

この書き出しは『ザデイグ』のそれと五十歩百歩である。また主人公カンデイドが館の姫君キェネゴンドと結ばれるまでの所謂「すれ違い小説」的筋書も同一である。だがザデイグの幸福を阻んだものは浮氣、嫉妬、食欲、野心等々の個人的悪徳であつたのに、カンデイドの幸福を阻むものは血統、地位、戦争、狂信、宗教裁判、派閥対立、等々の社会的悪徳となる。作者が『カンデイド』において粉粹しようと欲した障害は『ザデイグ』におけるよりはるかに強大であつた。したがって彼はこの超人的障害を超刺させるために主人公にいきおい超人的性格を與えなければならなかつた。それが『カンデイド』の異常な迫力となつて成功しているのだ。これは言いかえれば作者の諷刺精神が個人より社會へと強烈に轉化して行つたことに他ならない。

またカンデイドが首尾よく最後に再會した戀人キェネゴンド姫はもはや昔日の美貌をまったく失つた凡婦であつた。しかもなおカンデイドに愛されていると思いつゞける彼女にカンデイドは始めて深い幻滅の悲哀を感ずる。これは王妃アスタルテにたいするザデイグの

終始變らぬ愛情と比べて興味深い結末であるばかりでなく、戀人シャトレ夫人に裏切られた(彼女は詩人サン・ランベールと情交をもつにいたる)ヴォルテールと、彼女との戀に酔ひ痴れていた十年前の『ザデイグ』時代の彼との間の、大きな變化を物語るものである。

おそらく讀者は『カンデイド』のうちに『千一夜物語』や『イソップ寓話』をはじめ『桶物語』や『ガリヴァー旅行記』からの模倣を多数見出すであらう。こうした先人の模倣にみちた『カンデイド』がなおも獨特の魅力をもちえたのは、まさしくヴォルテールの思想と文體に歸せられうるであらう。とりわけヴォルテール独自の表現形式に負うことに注目すべきである。第十八章「エルドラド一國」に到達したカンデイドは、僧侶の存在を認めぬ老人に向つてこう述べている。

「おや、それでは(エルドラド一國には)坊さんはいないのですか。教え、議論し、支配し、陰謀をたくらみ、意見の違ふ人を焼殺す坊さんは。」

「教える」と「陰謀をたくらむ」あるいは「焼殺す」とは矛盾した概念内容である。しかもヴォルテールはこゝうした反對や矛盾を好んで接續詞なしに並列する。「敬



虚な狂氣、「有徳な暴力」とはヴォルテールがもつとも得意とした用語である。これは決して語呂の遊戯ではなく、対象そのもののうちに存在した矛盾の率直な表現であつたのだ。エミール・ファゲはヴォルテール思想の性格を「明確な觀念の混沌」と斷じているが、おそらく彼はヴォルテールの表現形式の矛盾をヴォルテール自身の矛盾と解したのにちがいない。

「だが私たちの畠を耕さねばならない」とは『カンディード』の最後の言葉であり、一世の名句としてたえず繰返されてきた。そして多くの批評家たちがそれを様々に解釋した。或る者はそこに「隱遁への希望」を、或る者は「勞働への讚美」を、或る者は「エデンの園」を、見出しうると信じた。一般に作者は結語に苦しむものであるが、批評家や讀者をして作者自身以上に苦しませることができうるならば、その結語は成功であつたと言うことができよう。その意味においてヴォルテールは『カンディード』に見事な結末を與えたわけである。

私はこの見事な結語を詳細に検討する紙面をもたないので、こゝでは私の立論の仕方に従つて『ザディグ』の結末と『カンディード』のそれとの各々の特色と兩者

の相異を指摘するにとゞめる。すなわち「バビロンに還れ」と告げる白髪の隱者（實は天使）の眞意を信じかねて「しかし」Erais を繰返すザディグは希望と不安の葛藤から脱し切ることができなかった。しかしカンディードはもはや狐疑逡巡しない。なぜならば、前に擧げたカンディードの結語は最後にはじめて氣まぐれに置かれたものではなく、その前頁でそのまゝそっくりの形で見出される、すなわち「だが私たちの畠を耕さねばならない」という結語は、これからの自分たちの生き方にたいする不退轉の決意の再確認であるからだ。兩作品の結末はこの點において作者の思想的成長過程の二つの重要な目盛を示しているようである。

### 三

一六八九年七月十五日の夕方、「お山の聖母」修道院長アベ・ド・ケルカボンが妹のケルカボン嬢とサン・マロ海岸を散歩していると、一艘の小舟が入江にはいつてきた。食料品を賣りこみにきたイギリス人である。彼らは上陸しても僧院長や妹に目もくれなかったが、一人だけそうでない若者がいた。彼はケルカボン嬢に無雜作に頭

を下げた。長髪をまきつけた頭は無帽、脛もむき出し、足には小さなサンダルをはき、刺子の胸着をきっかりと着こんだ勇壯優美な姿は、兄妹の注目を惹いた。彼は持参した酒を二人にすゝめ自分も飲んだ。そのいかにも氣取らぬ態度にすっかり魅せられた二人は、彼に、何者で何處へ行くかと尋ねた。すると彼は、自分は何も知らぬが、物好きだから、フランス海岸がどうなっているかを見たかったが、もう見たからには歸るつもりだ、と答える。

これが自然兒登場のあらましである。主人公の描寫はザディীগやカンディードのそれと異り具體的詳細にわたる。すなわち自然兒はもはや觀念ではなく人間であり、それも思いきり素樸な人間である。彼がいかにして戀愛し、學問し、反抗するか、ということが『自然兒』の大筋である。

自然兒は自らヒューロン人(北アメリカの土着民)と信じ且つ自稱していたが、實はカナダに出征したまゝ音信を絶ったアベ・ド・ケルカボンの兄ケルカボン將軍夫妻の忘れ形見であることが分る。いまや叔父叔母となつたケルカボン兄妹のすゝめでキリスト教徒になることを承

諾した自然兒はケルカボン嬢の友サン・チーヴ嬢を代母として洗禮を受ける。ところが自然兒はこの代母にたいする戀の洗禮も受けてしまう。彼は或る日サン・チーヴ嬢の寢室に侵入して彼女に結婚を迫る。嬢の叫びでかけつけたサン・チーヴ僧正は事の重大さに驚き、代官と相談して娘を尼僧院に送りこんでしまう。自然兒の不幸はこゝから始るのだ。代母との結婚は許されないと叔父叔母より言われた自然兒はパリの國王に直訴に赴くが、却つて宮廷人の奸計でバスチーユに投獄される。他方、尼僧院より選されたサン・チーヴ嬢はバスチーユに捕われているという自然兒を救い出すために自らヴェルサーユに赴き、自らの操を犠牲にして彼を救い出す。自由の身となつた自然兒から妻と呼びかけられた時、サン・チーヴ嬢はすでに死の床にあつた。

ヴォルテールは小説のみならず戯曲においても戀愛を主題とすることを好まなかつたし、また戀愛を描くことにおいて無能を暴露した。だがあくまで單なる背景にすぎなかつた自然兒とサン・チーヴ嬢との戀愛は『ザディীগ』や『カンディード』における戀愛とかなり趣きを異にしていることに注目すべきである。ザディীগと王

妃アスタルテ、カンディードとキユネゴンド姫は愛し合  
ってはいても、運命の障害に挑戦して彼らの戀愛を成就  
しようとはしなかった。だが自然兒は突進する。また相  
手のサン・チーヴ嬢も彼に勝るとも劣らなかつた。彼女  
はアスタルテやキユネゴンドのように手を拱いて戀人の  
到來を待つ無能怠惰な女性ではなかつた。こうした情熱  
が次のような烈しい官能的欲望によって支えられていた  
ことも當然である。

「自然兒を寢室に案内してから、ケルカボン嬢と友サ  
ン・チーヴ嬢は、ヒュロン人がどんな寢方をするか、大  
きな鍵穴から覗かずにはいられませんでした。二人は彼  
が蒲團を床板の上に展べて世にも美しい恰好で休んでい  
るのを見ました。」(第一章)

「ケルカボン嬢とサン・チーヴ嬢は小さなランス河の  
ほとりに生えた柳と蘆の間をさまよいました。すると川  
の真中かなり色白の大きな姿(自然兒の裸身)が両手  
胸の上に組んで突立っているのを認めました。二人は大  
きな叫び聲を出し逃げました。だが結局、好奇心に負け  
た二人はそつと蘆の間に身を忍ばせました。そして誰に  
も見られる心配がないと分ると、一體何事なのかと見た

くなりました。」(第三章)

こうした性の(特に女性の側からの)描寫はデイドロの  
『ブーガンビル旅行記補遺』(一七九六年)に登揚する土  
人の女たちが白人の旅行者の肉體に寄せる關心と同様に  
女性の快樂への正當率直な欲求を是認しているようであ  
る。それは十八世紀の女性たちがいだきはじめていた性  
の解放の反映でもあろうか。だがそれにもまして自然兒  
が戀人サン・チーヴ嬢の寢室に躍りこんで結婚をせまる  
場合はおそらく本小説中の壓巻ともいふべきものである  
う。

「自然兒は到着するや否や召使の老婆に戀人の居間を  
尋ね、しまりの悪い扉を押しあけ、寢臺の方へ馳け寄り  
ました。サン・チーヴ嬢は目を覺して悲鳴をあげまし  
た。

『まあ！ 貴方ですの！ あら！ 貴方！ お止しな  
さい！ 何をなさるんです。』

彼は答えた。

『貴女と結婚するんです。』

そしてもし彼女が教育ある女性のたしなみを充分に發  
揮して懸命にもがき抵抗しなかつたならば、彼は實際に

彼女を妻にしてしまったかも知れない所でした。

自然児は洒落や冗談を解しませんでした。彼はこの氣取った彼女の態度にひどく不満でした。

『私の最初の戀人アカバカちゃんはこうではなかった。貴方はすこしも率直な所がない。貴女は私に結婚の約束をしたが、結婚の意志がないではありませんか。それは貞女の第一の掟に背くものです。私が貴女に約束を守ることを教えてあげましょう。貴女を婦徳という本道にもどしてあげましょう。』

自然児は、洗禮の時に與えられた名前の主である彼の守護神ヘラクレスにふさわしく、男性的で大膽な徳力を備えていました。そこで彼はこの力をひろく全面的に彼女の上に行いかけたのです。

もちろんヴォルテールは自然児の態度を野蕃人の率直な衝動として文明人のそれに對置しようとしたのではない。それは自然児の名に假託された新しいヨーロッパ人の理想像であつたのだ。なぜなら自然児はヒューロン人に育てられたが純粹のフランス人であり、あらゆる偏見から解放されているが「英譯のラブレールとシエクスピヤを少々讀み、シエクスピヤは暗誦している」(第八章)

からである。

こゝに何氣なく而も當然のように引用されているラブレールの名はヴォルテールにとって重大な意味を有する。從來、彼はラブレールにたいしてかなりの偏見と輕蔑を示してきた。彼は有名な『哲學書簡』の中でスイフトとラブレールを比較して次のように述べている。

「スイフトとラブレールは同じく司祭であり、しかも一切を嘲弄するという評判が高い。だがラブレールはその世紀を凌駕しえなかつたが、スイフトははるかに凌駕している。わがムードンの司祭(ラブレール)は、その途方もなく譯の分らぬ書物の中へ、底抜けの陽氣さとこれ以上ない爲たい放題言いたい放題をばらまいた。彼はこれでもかこれでもかと博識、猥談、欠伸の出る話をひけらかした。……この全作品を理解し評價しようとする氣負うような人は餘程へんな趣味をもつた一部の人だけであろう。……あれだけエスプリのあつた男がそれをこんなあさましいことにしか使わなかつたことを、人は忌々しく思う。彼は酔いどれ哲學者であり、酔拂った時しか物を書かなかつた。スイフト氏は正氣の時の、そして上品な附合い仲間のラブレールである。彼にはもちろんこの先生の陽氣

さはないが、わがムードンの司祭に缺けている繊細さ、ことわり、選擇眼、良き趣味を完全に具えている。」

このようにラブレールを考えていたヴォルテールが彼の愛する自然兒の數少い讀書のうちにシエクスピアと並べてラブレールを置いたことは重大な變化である。しかもそれは偶然そこに置かれたのではない、なぜなら作者は『自然兒』第一章でアベ・ド・ケルカボンの人物をこう描いているからだ。

「彼は神學も相當に心得ていました。そして聖アウグスティヌスを読みあきた時はラブレールを読んで楽しみました。だから彼のことを良く言わない者はありませんでした。」

ラブレールにたいするヴォルテールの考え方に變化があったことは疑う餘地がない。しかも次に引用する書簡からすれば、その變化の時期はかなりはっきりと推測できるであろう。

「私は『クラリサ』(リチャードソン作)の後で、ラブレールの何章かを讀みかえしてみました。私はラブレールをホラティウスに比肩させるつもりはありませんが、もしホラティウスがすぐれた書簡詩の先驅者であるとすれば、

ラブレールはすぐれた滑稽譚の先驅です。……私はかつて彼をあまりにも悪しざまに述べたことを後悔しております。」(デファン公爵夫人宛、一七六〇年四月十二日付)

これとほぼ同じような内容をもった書簡がやはり前年の一七五九年に同じデファン夫人に送られているが、それは右にかゝげたほど決定的な表現を用いていないので證據文獻として引用できないが、以上によってヴォルテールのラブレールにたいする考え方の變革期を一七五九年より六十年頃に置くことが許されるであろう。またさらに降って『自然兒』發表の翌年には次のような小品が出版されている。

『×××公宛の書簡、キリスト教について悪口をのべたと非難されるラブレールその他の作家について。』(×××公とはフランスウィック・ルネベリ公爵チャールス・ウィリアム・フェイナンドである。)

この小品によつてもヴォルテールが單にすぐれたブックフォン(滑稽)の先驅者としてのみならず偉大な自由思想家としてラブレールを高く評價するにいたつたことは明白である。ザデイーグやカンディードとはおよそ似つかぬ自然兒の男性的戰闘的性格はこうしたラブレールの思想

の支えによつてはじめて可能なはずである。

だがまだ問題は結果を認めたに他ならない。なぜなら、ラブレールを讀み返し再評價することによつてのみヴォルテールが『自然兒』という傑作を作りえたとするならば、「傑作を讀めば傑作が生れる」という愚劣な結論に到達するからである。したがつて私は次のように設問しなければならぬ、ヴォルテールは何故にラブレールを讀みかえす氣になつたか、また何故にラブレールをより良く理解するに到つたか、ということである。これにたいする解答は『自然兒』執筆の動機をかなり明らかにしてくれるはずである。そしてその解答を求めるためには『カインディード』以後『自然兒』に到るまでのヴォルテールの周邊に起つた諸々の事件が彼の作家精神にどのようにはたらきかけたかを知らなければならぬ。

すでに充分知られている事件としては一七六二年三月九日(『カインディード』出版後三年) ツールーズに起つたカラス事件であろう。これは同市に住む新教徒ジャン・カラス(印度羅紗商人)が長男マルク・アントワーヌの改宗(舊教への)を怒り彼を殺害したと告發され、車刑に處せられた事件である。出入りの商人オディベールなる者

からこの事件を傳へ聞いたヴォルテールは事件の詳細を檢討し、そこに狂信の犠牲を確信するや、幾多のパンフレットを發表してカラスの無罪を主張し、彼の名聲と交友關係を動員して狂信と闘つたのである。『寛容論』(一七六三年)はこうした闘争の中から生れたものである。

その結果、遂にツールーズ高等法院は一七六五年三月九日(カラス一家にたいする判決より丸三年の同月同日にあたる)カラスの無罪を認めざるをえなくなつた。これはヴォルテールの生涯におけるもっとも輝かしい勝利であると共に彼の對社會態度の戰鬪的性質への轉化を示す重大事件である。しかも不幸にしてこの種の事件は稀ではなかつた。やはりヴォルテールの干與したラ・バル事件(一七六六年)シルヴァン事件(一七六七年)等々はカラス事件と同様に狂信の犠牲に他ならなかつた。こうした一連の迫害事件の延長において生れた『自然兒』が闘志にみちた正義の書となつたことは偶然ではない。

やはり同じ頃(一七六六年)に起つたジュネーヴ市民權を要求するナチーフ・ロベール(外國人移住者子弟)にたいするヴォルテールの援助も當時の彼の思想的社會的立場をより明確にする事件であつた。當時のジュネーヴは市民

citoyens、町民 bourgeois、移住者 habitants、移住者子弟 natifs の四階層に分れ、後者の二階層、とりわけナチーフはジュネーヴ市民としての特権を剝奪されていたのだ。彼らはルソーの『社會契約論』や『エミール』によって漸く自分たちの階層の利害に目覺め、前二者の支配階層と對立するに到つたのである。そこで彼らが自分たちの後援者として着目したのがカラスの擁護者ヴォルテールであつたことは偶然ではなからう。ヴォルテールとはいわば犬猿の仲であつたルソー自身すらも、それが適切な處置であることを、ナチーフの指導者たちに認めていたのである。このことはカラス事件の立役者ヴォルテールの役割がどれほど大きなものであつたことを物語っているであらう。ヴォルテールはそうした期待に背かずナチーフたちにあらゆる援助を惜まなかつた。彼がナチーフの指導者オジェールに宛てた次の書簡は彼の絶大な自信と意欲を雄辯に語ってくれる。

「これは私が作成した請願書(ジュネーヴの政府にあてた)です。これを持って出かけなさい。そしてできうるかぎりすべてのナチーフを集合させなさい。……だがおそらく政府は諸君に壓力を加えてくるでしょう。それは

前以て心得ていなければなりません。しかし何事も恐れではなりません。私の信用に頼りなさい。たとえ貴方々がヴェニスの宗教審問所の鐵鎖につながれようとも、私は救い出してあげるでしょう。」(Cornuand: Mémoires historiques et politiques (1770—1795) éd. Cherbuliez)

私が敢えて「ナチーフ事件」をこゝに紹介した所以は、カラス事件がいわば個人の解放であつたのに對して、これは階級のそれであつたこと、を強調したいからである。もちろん兩事件をそれほどに區別することは私の主要意圖ではない。要は『自然兒』創作の動機が『ザディグ』や『カンディード』のそれよりもはるかに濃厚な社會的思想的色彩を有することを證明したのである。そしてそれはとりもなおさずラブレールにたいする再評價に通ずるものと信じられるからである。

私は以上において『自然兒』の革期的性格を幾分なりとも紹介したつもりであるが、しかし最近のヴォルテール研究者ヴァロー氏のように『自然兒』を以てヴォルテールの革命主義への轉換期の作品と見なすことはできない。たしかにフランス革命の萌芽は『自然兒』にかぎらずデイドロの『ラモー甥』やポーマルシェの『フィガロ

の結婚』のうちに少からず見出されるが、それらは革命主義と名づけられうるものではない。『自然児』についてのみ論ずるとしても、戀人を死に追いやった悪徳漢供に復讐を思い立つ自然児が最後には人生の無情を歎いて復讐を思い止る條は作者の意圖が革命家のそれに到達しえなかつたことを示している。しかしヴォルテール小説のうちで『自然児』の占る位置はやはり劃期的である。したがって私は『自然児』をヴォルテール小説の最頂點に位置づけることを躊躇する者ではない。

三

『ザディグ』より『カンディード』を経て『自然児』にいたるヴォルテール小説の變化は進歩發展と名づけるに適しいが、『パピロンの王女』(一七七八年)も引きつゞいてその進歩發展の道を辿るであろうか。私がこの小説を問題とする所以は、そこにヴォルテール小説の進歩を見出すからではなく、むしろその破滅を見出すからである。もちろん成功と失敗、進歩と退歩を容易に區別しうるとは考えないが、反面、作家の精神の特質や變貌は成  
功作においてのみ證明されるとはかぎらない。『パピロ

ンの王女』が小説として失格する所において作家ヴォルテールの精神は他のいかなる傑作におけるよりも多く吐露されているのである。私はこの思わせぶりの結論を實證してみたい。

パピロンの老王ベリユスの一人娘フォルモザントは絶世の美人であつた。國王は彼女に適しい婿を選ぼうと考える。そこに名乗り出たのがエジプトのファラオン、インドのシャー、スキチャの大汗であつた。老王は三人の王に對し、英雄ネムロブッドの殘した弓を引くこと、パピロンの闘技場に放たれる荒獅子を倒すこと、さらに最高の智慧を有すること、の三條件をみたした者に娘を與えようと約した。だが三王とも落第する。そこに無名的美丈夫が現れ、見事それらの條件をみたすが、いづこの誰とも分らぬこの青年に娘を與えかねる老王、この青年に烈しい思慕を寄せるにいたつた王女フォルモザント、嫉妬に狂うエジプトおよびインド王、父なる人の死の報に姿を消した當の無名青年(實はフォルモザント姫の從兄に當ることが第四章で明らかになる)、神の御告げによつて巡禮の旅にのぼる王女フォルモザント。そして王女は胸に秘めた青年への思いを世界の果までの旅において辿



る。彼と彼女は御多聞に洩れぬ「すれ違い」を演じつゝ、支那、印度、ロシア、プロシヤ、フランス、イギリス、イスパニヤを廻つて最後に目出たく再會、結婚する。

これは戀物語と云わんよりは世界風俗記に近く、人物も筋書も思いつきに走つて統一を缺き、張りめぐされた伏線にも矛盾が目立っている。それは前三小説に比べても一向に小説らしからぬものだ。作者も小説を書こうと眞向から取組んでいる様子は見えない。したがってこれは小説としてみるならば明らかに失敗である。私は小説としての失格をさらに追究するよりも、むしろその失敗作を通じて晩年のヴォルテールの到達した精神を検討してみよう。

「人間の本質は楽しむことであり、それ以外は一切愚劣であることを人々(三王の技を見物する観客たち)は認めました。このすぐれた道徳はいまだかつて事實による以外は裏切られたことはありません。」(第一章)

齡七十四歳に達したヴォルテールの人生觀はこんな風に要約されているのだ。たしかにヴォルテールは樂天主義者であった。しかし彼は決してキリスト教的攝理觀の上にあぐらをかいた樂天主義者ではなかつた。彼の強烈

な人生肯定の背後には當時の科學思想にたいする絶對の信賴を見のがすことはできない。彼は本小説中にしばしば登場する「不死鳥」(無名青年の從者)にこう述べさせている。

「復活などというものはこの世の中でもっとも單純な事です。一度生れるのも二度生れるのも別に不思議ではありません。この世の中はすべて復活です。毛蟲は蝶となつて復活し、地中に置かれた種子は木となつて復活します。地中に埋められたすべての動物は草となり植物となり、他の動物を養つてすぐその體の一部となります。物體を形成するすべての分子が他のものに變化するので、全能の神オロスマデが、もとのまゝの性質で復活するといふ恩恵を授けてくれたのは、なるほど私だけですがね。」(第四章)

こうした見解はデイドロやドルバック等の啓蒙哲學者に共通したものである。ヴォルテールが年齢に逆行するかのようになつて若々しい情熱を示してくるのは、彼がたえず後輩たちの前進に注意を怠らなかつたからである、たとへ誤解することはあつても。

ルネ・ボモー氏も指摘しているように(René Pome-

an: Voltaire par lui-même, 1955 "Ecrivains de tousjours") ヴォルテールは自己について語ることをたえず拒否しつづけてきた作家である。この態度は彼のほとんどすべての作品が匿名もしくは無名で發表されているという事實にも示されている。おそらく彼がもっとも信頼していたはずのダランベールに宛てた書簡においてすら自己の作品を認めようとしなないことは、むしろ奇異な感すら受けるのである。それは反対派の攻撃から身を守るための手段にはちがいないが、それにしてもヴォルテールのミスチフィカシオンは徹底的であり異常であったと言えよう。しかるにこのヴォルテールが『パピロンの王女』の最後において従來の假面をかなぐりすてて素顔で登場してくるのは興味深いことである。

「詩の女神たちよ、貴方がたは常に私の味方であってください。向う見ずな續篇作家供が彼らの作り話によって、この忠實な物語の中で私が人間たちに教えた真理を書わないように防いでください。彼らは取えて『カンディード』や『自然児』を偽作し、或る元カプシン派のごときは純潔なジャンヌ(ジャンヌ・ダルク)の純潔な冒険をバタバヤ版においてカプシン派にふさわしい詩句を以

て醜く變形させてしまったのです。……お！ 詩の女神たちよ、マザラン學院のお喋り教授、唾棄すべきコジエを黙らせてください。……銜學者ラルシェに轡をはめてください。彼は古代パピロン語を一言も知らぬくせに、また私のようにエウフラテスやチグリスの河邊を旅したこともないのに、生意氣にも、世界でもっとも偉大な國王の娘、美しきフォルモザントやアルデ姫やこの尊敬すべき宮廷のあらゆる女たちがパピロンの大寺院においてアジャのあらゆる馬丁供と枕を交した、と主張したので。……わが愛すべきアリボロン(フレロン)よ、私は君にはあの『エコセーズ』上演後一月もたえずあれほど抱腹絶倒させられたが、私は君に私の『パピロンの王女』を捧げよう。存分に悪口を言ってくれたまえ。そうすれば世間の人もこの作品を讀んでくれるから。……」

かつてヴォルテールがこれほど自らの假面を剝いで敵に挑戦した例は見出されない。これはヴォルテールの到達した並々ならぬ自信の結果であろうか、それとも抑えがたき憤激の結果であろうか。いずれにしても、小説として失格せる本書においては、作家ヴォルテールよりは人間ヴォルテールこそ問題とされるべきであろう。

× × ×

私は以上の四篇を通じてヴォルテール小説の誕生發展崩壞の過程を追究してきたが、それはあたかも變化につぐ變化の連続であつたかのごとき印象を興えてしまつたかも知れない。しかし私は古典主義作家としてのヴォルテールの基本的態度までが大きく變革されたと主張する者ではない。『パビロンの女王』(第十章)においてヴォルテールは當代のフランスをこんな風に描いているのだ。

「もはや眞の藝術はほとんど存在せず、もはや天才もおよそ存在しませんでした。過去の世紀の業績について出鱈目に議論することが功績とされていきました。キャバレの壁に下手な繪を塗りたくる連中が大家の繪を知つたかぶりして批評していました。紙を汚すだけの徒輩が大

作家の作品を醜く歪めていました。無智と惡趣味が他の書きなぐり屋供を備っていました。同じ事柄が違つた表題で百冊の本の中で繰返されていきました。」

この描寫から、居酒屋の壁黒々と自作の詩を書きつける自由詩人たちを諷刺したボワローの『詩法』の一節を連想することは、きわめて容易なはずである。たしかにヴォルテールはシェクスピアから少からぬ衝撃を受け或いはラブレレーにたいする誤解を是正はしたが、所詮は、古典主義文學の立法者ボワローの直系であつたのだ(すくなくとも文學的感覚において)。こうした確認は「したがってヴォルテールは本質的には保守的な事大主義者にすぎなかつた」という結論を許容することはできない。なぜならば動搖や矛盾は無節操と同義ではないはずであるから。

(二橋大學助教授)